



未来へつなぐ

Vol.

181



文／本間 吾里砂

Switch! SUSTAINABLE TRAIN

鉄道の環境優位性やCO₂排出量「実質ゼロ」を目指すこと等をPRするロゴマーク

JR北海道グループでは、二〇一九年度に策定した長期経営ビジョン『未来2031』において「ESG経営^(※2)の実践」を掲げ、その一環としてさまざまな角度からCO₂排出量の削減に力を入れてきました。VVVF制御方式や回生ブレーキシステム、車体の軽量化、LED照明の採用等による省エネルギー車両の導入やディーゼル車両でのアイドリングストップなど、各種対策を実施。駅照明や信号機などをLED化し、駅社屋上にある融

設備や環境を見直し CO₂排出量を削減

二〇二四年十二月、CO₂排出量「実質ゼロ」に向けオフサイトPPA契約^(※1)を締結し、駅をはじめとする鉄道施設等で再生可能エネルギー電力を活用します

雪装置には省エネ機器を設置しました。そのほか、太陽光発電事業への参入、執務室内やホテル客室照明のLED化、職場をはじめとする身近なところでの節電など、きめ細やかな取り組みを進めています。

再生可能エネルギーで 脱炭素社会の実現に貢献

二〇二〇年一月、政府が温室効果ガスの排出を二〇五〇年までにゼロにする「2050年カーボンニュートラル」を宣言したことで、JR北海道でも二〇二二年二月に長期環境目標「JR北海道グループカーボンニュートラル2050」を策定。これにより、二〇五〇年にグループ全体のCO₂排出量を「実質ゼロ」にすることを新たな目標として打ち出しました。

二〇二四年十二月十七日に



新千歳空港駅

は、合同会社HARE晴れを発電事業者、北海道電力を小売電気事業者、JR北海道を需要者とする三者間でのオフサイトPPA契約を初めて締結。合同会社HARE晴れが太陽光で発電した再生可能エネルギー電力を、北海道電力を通じて調達し、新千歳空港駅や小樽駅等で使用することになりました。年間想定発電量は約三八〇万k

Whであり、年間約二〇〇トンのCO₂排出量削減を達成できる見込みです。そして、「新千歳空港駅」と「小樽駅」については、再生可能エネルギー電力と年間電気使用量相当の環境価値を組み合わせることで、電気の使用に伴うCO₂排出量が「実質ゼロ」となります。

今後、札幌圏電車（721系）の更新、社用車の電気自動車等への置き換え、照明のLED化等の取り組みを推進していく計画です。老朽更新については高効率な機器や設備の採用による更なる省エネ化を推進する一方、太陽光発電の拡大や風力、水力など再生可能エネルギー由来のCO₂フリー電気の活用についても検討し、二〇五〇年CO₂排出量「実質ゼロ」に向けて脱炭素の取り組みを継続していきます。

①

(※1) 発電事業者が電力需要場所の敷地外に設置された再エネ発電設備等で発電した電力を需要者に供給する電力契約のこと

(※2) ESGは、Environment(環境)、Social(社会)、Governance(ガバナンス)の頭文字を取って作られたことばで、持続可能な発展を目指す経営のこと